

日本に於ける英語学習

岡 田 堯*

Learning English in Japan

Takashi OKADA*

(Received September 20, 1974)

1 文型と学習

中部工業大学紀要第8巻に示した文型を、試みに実際の授業に取入れ、昭和48年度の前期に、本学の新入生の進度Bのクラスの教材に使用することとした。

最初の授業にそれらの文型について解説をし、その後学生には毎時新教材の初めの凡そ10行について、文の解剖を宿題として課した。宿題はノートの用紙に書いて提出させ、その部分については教室で解釈と並行して文の解剖を学生と共にしながら進むこととした。

前期の間、実施した結果を反省した結果、文型を解釈への助けとして利用することの困難さを悟り、後期には宿題を中止した。文解剖の宿題から得たものは次の諸点であった。

1. 高校の文法で学習した、いわゆる5文型をほぼ完全に修得した学生にとっては有効とも見られるが、逆に必要のない学習作業ともみられる。

2. 英文の構造について確実な知識を持たない学生にとっては、次の点に解剖の困難が見られる。

(a) 主語・動詞はほとんど確実に指摘できるけれども、稀れには、すべて文頭にある語を主語とする学生がいる。

(b) 目的補語の理解は甚だ困難である。一般に修飾語と補語の識別が困難であって、その結果長文の文意が把握できない。

(c) 現在分詞・過去分詞が文中にある場合の用法についての知識が不十分である。

(d) 接続詞・関係詞をふくむ複文の場合、品詞の区別が困難であり、節の切れ目を誤ることが多い。特に日本語とくらべて、接続詞が節の頭につくことから、接続詞についての理解がむづかしく、“that”の場合に適確に把握できない学生は意外に多い。

(e) 単語の品詞の判断を誤ることが多い。その結果は

文の構造が不明となり、文意がつかめない。

以上が気づかれた諸点であるが、練習の回を重ねた結果、初期の目的達成に明るい見通しを得られず、中止せざるを得なかった。

文の構造は大部分文意がわかることと平行して理解されるものようである。

2 発見学校

数年前オーストラリアで開かれた世界教育者会議に出席した私の友人の話では、世界六十数か国からの出席者があったが、発表はすべて英語でされた。その聴衆の中でイヤホンをつけて同時通訳の助けをかりたのは、残念ながら日本の代表だけであったとのことである。

中津燎子氏の著書「なんで英語やるの?」の中の発見学校の記録には率直に日本人の英語学習が述べられていて、教えられるところがある。その中に、外国から来た友人との会話に次のようなところがある。――

最初のレッスンで、私が子供達全員に「自分が自分をどうみるか、どう考えるか?」というマンガを描かせた時、彼女は、直ちに、その理由を知りたがった。

「日本語に殆んど主語がないからよ」

「ふーん?」

「よく気をつけてきてごらん。私が、私が、なんて喋っている人いないでしょう」

「そうだ!!」

「でも英語はそれが根本なのよ」

「わかった!!」

私が生徒に教えているのは、日本語と英語、日本人と英米人の考え方のちがいが、感じ方のちがいが、言語のつかわれ方のちがいが、音のちがいがいったが、そのためには子供たち自身、自分が毎日使って生活している日本語について、しっかりした認識を持たねばならなかった。――

以上を読んでいながら私は日本人の英語学習が、アルファベットが共通である国の人々の英語学習と非常に差の大きいことを改めてはっきり悟った。

* 外国語系列 (Department of Liberal Arts and Sciences
—Foreign Languages)

3 日・英語の比較

どんな点に英語学習の困難があるかをさぐるため、川端康成の「雪国」の一部とその英訳を見よう。(a)は Seidensticker の訳文、(b)は Kirkup が添削した訳文である。

- (1) 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。
 (a) The train came out of the long tunnel into the snow country.
 (b) As we emerged from the long tunnel linking our two northern counties, the snowland lay before our gaze.

上の(a)の train は「抜ける」の主語、we は「雪国であった」の部分について考えられる主語である。日本語では、英語の「1人称、2人称、3人称」のどの主語も自由に省略される感じであって、日・英両語の比較では特に目だった違いである。

(b)にある as という語は、接続詞として比較・時・理由・譲歩などをあらわし、関係詞・前置詞としても用いられ、その用法と意味は学習者を苦しめる。

- (2) 夜の底が白くなった。
 (a) The earth lay white under the night sky.
 (b) The pit of night turned white.

上の英文の和訳ができない場合も考えられるが、その困難点は lay white 及び turned white にあり、要は lay と turned の動詞の意味・用法にあらう。turn のように、日本語に取り入れられた語は日本語のターンの意味がわざわざする。

- (3) 信号所に汽車が止まった。
 (a) The train pulled up at a signal stop.
 (b) The train stopped at a signal halt.

このような文章の train は英文の主語であり、日本語でも「汽車」が主語であると言ってよいのではなかろうか。英語は主語中心の構文であり、日本語は動詞中心の構文であることは、日本人も外国人も認めるところである。私としては、日本文に主語があるとか、ないとかの議論はやめて、「日本文には構文上の主語はない場合が多い」という中間的主語存在論に賛成である。

(4) 向こう側の座席から娘が立って来て、島村の前のガラス窓を落とした。

- (a) A girl who had been sitting on the other side of the car came over and opened the window in front of Shimamura.
 (b) A young woman sitting on a seat on the other side of the carriage stood up, came over to the window next to Shimamura and slid

it down.

日本文とくらべて(a)(b)の英文が「車の反対側にすわっていた娘」という風に説明的な表現を用いている点は、日・英の思考の相違とみてよいのではなかろうか。

日本の現在の英語学習過程で関係代名詞が出てくるのは、通常中学3年であるが、その後3年も5年も英語を学んだ学生のうちに、この関係代名詞の理解が不完全なものがかかり多い。文中の句・節を確実に把握することは、前置詞・接続詞・関係詞に関連する困難点である。

- (5) 雪の冷気が流れこんだ。
 (a) The snowy cold poured in.
 (b) The cold, snow-laden air rushed in.

(a)(b)に品詞の異なる cold という単語が見られる。品詞について考えられる点は、日本語と英語は大きく違った別箇の存在であるにもかかわらず、同じ文法用語を用いて学習者をまどわしていることである。文法で名詞と言い、形容詞と言っても、英文法と国文法ではその内容は大きな違いを持っている。私見として、国文法で従来の品詞名を使い、英文法では、ナウン、アジェクティブ、アドバープ、バープのような仮名文字か、もしくは英語そのものを使用するがよいと思う。それでこそ初めて、形容詞とアジェクティブの違いが理解されるであろう。

(6) 娘は窓いっぱいになり出して、遠くへ叫ぶように、「駅長さあん、駅長さあん。」

- (a) Leaning far out the window, the girl called to the station master as though he were a great distance away.
 (b) She leaned out as far as she could, and shouted as if to someone far away: "Mister! Mister!"

上の文の主語の girl, she は共に「娘は」にかわるもので、日・英語共に主語を持つ文と考えられる。

動詞の部分の「叫ぶように」のところで、英語では仮定法が用いられている。仮定法という動詞の形は日本語には存在しないために、その理解はかなり困難をとまなう。あいまいに理解した結果は、動詞の現在形・過去形には無関係に自分の好きな時制にとって訳してしまう。時制の一致による過去形・過去完了形も相呼応して時制の知識を混乱させる原因となるようである。

(7) 明りをさげてゆっくり雪を踏んで来た男は、襟巻で鼻の上まで包み、耳に帽子の毛皮を垂れていた。

- (a) The stationmaster walked slowly over the snow, a lantern in his hand. His face was buried to the nose in a muffler, and the flaps of his cap were turned down over his ears.

- (b) The station master came walking slowly across the snow, a lamp in his hand, the lower part of his face wrapped in a muffler, the fur flaps on his cap hanging over his ears.

長い文とくらべて短い文は論理がはっきりするものであり、最近では昔とくらべて長文は減ってきたと言われる。英文の論理がはっきりするのは、主語があって、文が短いからだとも言われる。その点から言えば、上文の(a)は3文から成り、(b)は1文の長文であり、(b)は(a)より難解な英文と言える。事実(b)の a lamp 以下の構文は英文和訳の問題としてかなり多数の学習者をなやますことであろう。

(8) もうそんな寒さかと島村は外を眺めると、鉄道の官舎らしいバラックが山裾に寒々と散らばっているだけで、雪の色はそこまで行かぬうちに闇に吞まれていた。

- (a) It's that cold, is it, thought Shimamura.

Low, barracklike buildings that might have been railway dormitories were scattered here and there up the frozen slope of the mountain.

The white of the snow fell away into the darkness some distance before it reached them.

- (b) Is it really as cold as that, Shimamura wondered, looking out.

He could see some sort of barracks, which he supposed must be railwaymen's quarters, scattered around the foot of the mountain.

The pallor of snow gradually died away into darkness as it stretched away towards the foot of the mountain.

日本文は長い1文である。(a)には主語が4つあり、関係代名詞の主語を入れると5つある。(b)には主語が3つある。関係代名詞の主語を入れると4つある。

(a)の1行目は、主語の倒置を含めて、意外にむづかしい文と言えよう。2番目の文では、もちろん that 以下仮定法を含む形容詞節が困難点であり、3番目の文では some distance の扱いに困難点がある。

(b)の2番目の文にある scattered は、英文和訳の問題で最も学習者を苦しめられると思われる。3番目の文の as は次の it と共に困難点としてあげられよう。

4 日本語学習の困難

金田一春彦著「日本語」によれば、――

ヨーロッパでは、子供が学校へ上って、国語教育を受ける年限は、イタリアは2年、ドイツは3年、長くかか

るイギリスでも5年かかれればひととおり読み書きができるという。日本では小学校の6年、中学校の3年かかって、満足に新聞が読めない。高等学校を出ても、カナづかい、漢字づかいの正しい文章が書けないというのが定説である。戦後、日本の敗戦の原因の一部は日本語のわずらわしさにあると論ぜられた。ミッドウェイ会戦の奇襲作戦によって日本の連合艦隊を破ったブルーアンソ司令官は、「日本語は明確を欠くことばだから、トッサの場合の命令伝達に混乱を招くにちがいないと思って奇襲をかけた」と告白したという。――

以上の事実は日本語の完全な修得のむづかしさを証していると言えよう。

今年8月のある日の朝日新聞の天声人語には次のような記事があった。――

「私は受験をひかえている花の中学3年生です」という少女から手紙をもらった。トマトの絵入りの可愛い便せんに「天声人語と社説を、どうか夏休の間お休みにして下さいませんか」と誤字のない筆で書いてあった。この「花の中学3年生」は夏休の宿題に、毎日、「天声人語」と「社説」の要約、感想、字句解釈をやらねばならない。ところが、いくら読んでも何が書いてあるのか分からない日がある。1日に2時間以上もかかる時がある。「どうかお休みにして下さい」という切々たる訴えが、コラム子を悩ませる。――

この中学生の手紙から、中学卒業生の国語の力が決して満足なものでないことは明らかである。

また登村ヘンリー著「アメリカ人と日本人」のなかに「日本語は、日本人の私たちが使ってもむづかしいし、誤解を招きやすい国語です」のことがあがあるが、まことに同感である。ではなぜ、またどこが日本語はそんなに難解なものであろうか。

日本語の特徴として、擬声語や擬態語が多い。そのために日本語の表現は感覚的直感的であると言われる。たしかに日本の俳句はその中にもられた感情・余韻といったものが短い英文では表現不可能であり、英訳されたものは論理的な説明となるのが普通である。

日本語学習の困難点の第一は文字であろう。カタ仮名、ひら仮名、そして二千の漢字の修得には多くの時間を費して、しかもその結果は満点の成績をはるかに下まるものである。仮名のほかに漢字があるがために、多くのことが二重に存在する。最も手近な例は、日本の数字であり、またその数え方である。しかも漢字の読み方に至っては全く恐ろしい。「生」という字の読み方を即座に全部言える人は日本人のなかに果して何人いるのであろうか。高校入試、大学入試のどちらに於ても国語

は受験生にとって得点しにくい科目でありながら、案外それを意識しないものが多いのが現状である。これは日本語のあいまいさがわざわいし、むつかしいはずの日本語をやさしいものと錯覚させることに原因があろう。

外国人が日本語を学びはじめた頃の質問はほとんど例外なく「……は」と「……が」の区別である。そして私たちはそれに満足な答を与えられないのが普通である。私が思うに「は」と「が」の違いは、なるほど日本の文法学者の説明する違いもあるが、そのほかに強勢の意味を持っているように思う。

「これ、本です。This is a book.」というよりは、「これは本です」という方が強勢が感じられはしないだろうか。「僕、りんご、好き。I like apples.」というよりも「僕はりんごが好きだ」という方が強勢が加わりはしないだろうか。「日本人は表情が乏しい」と言われるが、日本語には助詞など、英語にはないことばがあって、これが表情に代わる働きをしているのではなかろうか。

漢字を並べた語句に難解の語句が多いことは言うまでもないことであるが、仮名で書かれた語句にも、難解のもの、誤解をまねくもの、あいまいのものが多い。

この日本語学習の困難さが、英語学習の困難さへと続くのは、あるまとまった思想の発表と把握の力が養われる機会がないためではなかろうかと推察される。手紙が書けない。英文和訳の解答の日本語を読んでも何のことを言っているのかわからない。こういった事実を生ずる根源に日本語のむつかしさがあると言えないであろうか。

5 むすび

日本に於ける英語学習の困難さは、日本語と英語の構造の違いによるものと考えていたけれど、以上に示したような考察を経て、実はそれ以上もっと根本的な原因として、日本語のむつかしさ、複雑さ、あいまいさがあることが考えられるに至った。英語はむつかしいものであるが、それ以上に日本語がむつかしいのである。従って、日本語のむつかしい生徒にとって英語はなおいつそうむつかしくなるのも当然と言えよう。

現行の中学1年からの英語を考えると、新入生として胸をふくらませて始まる1年は、英語という科目があってはじめて小学校と区別がつき、小学生に対する優越感を感じるといふ。その英語も1学期を終り、夏休が終ると既に落伍者が出はじめるのである。いわゆる一般動詞が出て、疑問文、3単現のsなどとなると、全く日本語と違った構造に接し、英語がきらいになるのである。2年生の初めには、これまた日本語にない現在完了形が

あらわれ、続いて現在分詞、過去分詞が現われて新しい負担になってくる。3年生になって関係代名詞が出てくると、いよいよ英語がわからなくなる生徒が目だって増加するのである。この現象は中学校の国語で低い評価を得る生徒には当然のことと言わねばならない。

高校に入って、関係代名詞、関係副詞、そして数多くの接続詞が現われ、難解の目的補語、分詞構文の加わった上に仮定法が続々と現われるに及んで、多くの生徒のあたまが混乱状態におちいる。

最近の統計から推察されるところでは、大都市の青年層の大学進学はやがて50%に達する日も遠くはなからうと言われる。この現実をとらえ、それに対処する方策は如何に進められているのであろうか。日本の文教費の少いことは、雑誌「英語教育」の10月号に見られる通りであるが、文教政策だけは貧弱なものであってはならないと思う。

入谷敏男著「言語心理学」のなかの「外国語学習の心理」の頁に、母国語をある程度修得してからの学習について次のことばが見られる。――

この場合に、二つの学び方が見出される。その一つは二つの言語環境をもつことによって、一つの環境にいるときは母国語で、他の環境にいるときは外国語でというふうな、それぞれの環境によってことばの使いわけを行なっていく場合（直接学習法）と、他は、母国語を中心とした一つの言語環境の中で、母国語を基礎として、これと比較しながら外国語を学ぶ方法（間接的な学習法）とがある。――

私は、私の経験から、これに似てはいるが異った学習法を示したい。

その第一の方法は、日本国内にいて勉強する方法であるが、何れにしろ、英語にすぐれるためには、英語の雰囲気にとまることが必須条件である。この点で私は開隆堂発行の「英語教育」9月号に記載された国弘正雄氏の中学時代の勉強法は最良なものの一例と言えよう。

国弘氏は東京都の六中に在学中、小石川で福原麟太郎先生宅から2軒おいて隣りに住んでいて、たびたび福原先生の姿に接して刺激を受けたとのこと、中学1年のとき、教育熱心の国弘氏の母君が、英語の勉強法を福原先生宅にたずねに行かれた。その結末は次のようであった。――

福原先生のお答えはどうやら簡にして要を得たものであったらしい。先生は中学3年までのリーダーの英語がすべての基礎をなすこと、ことばはやはり身体ごと覚えていかなくてはならぬこと、ことばの背後にある人間のいとなみをたえず頭におくことなどを話されたという。

それを口うつしに報告し、ぼくの努力を求める母の表情がいまに目の前に浮ぶが、さすがに達人の弁と感銘の深いものを覚えるのである。——

国弘氏の勉強法は、音読 500 回、その上に書いてみることであった。この練習が、英語の雰囲気の中に相当長時間ひたる結果になったことと思う。この努力あってこそ、今日の国弘氏の活躍が生じたと言える。この勉強法を今日にもってくるとすれば、さらに、音読の前にテープによるヒヤリングが加えられることになるであろう。聞きとり——音読——書取、この勉強法は日本国内にあって外国語を学習するための最良の方法であることに何人も異議はないであろう。

さて第 2 の方法は、高校または大学在学中に、1 年間日本を離れてイギリス、あるいはアメリカに留学し、あちらの家庭に宿泊して高校なり、大学なりに通学し、全く英語ばかりの生活をするのである。この方法の利点は、日本にいては容易に得られない聴取の力がつくことであり、もちろん一般の日常会話には不自由を感じない英語力が身につくことである。

上にあげた二つの方法は、すべて日本語を離れて、別人となって英語を学習するという態度である。

外国語指導法の研究は大いにされねばならない。そして英語学習に大切なものは、その環境づくりと、学習者の努力と根気であることを深く銘記しなければならない。

文 献

- (1) J.L. Cowan: *Studies in Thought and Language*, 1970, The University of Arizona Press
- (2) F. Waismann: *The Principles of Linguistic Philosophy*, 1968, Macmillan and Co. Ltd.
- (3) Yasunari Kawabata: *Snow Country*, 1968, Berkley Publishing Corporation
- (4) 中部工業大学紀要第 8 巻
- (5) ジェイムズ・カーカップ、中野道雄：「英語の優雅な技術」, 1973, 研究社
- (6) 現代日本文学大系「川端康成集」, 1968, 筑摩書房
- (7) 入谷敏男：「言語心理学」, 1967, 誠信書房
- (8) 泉井久之助：「言語の構造」, 1971, 紀伊国屋書店
- (9) 中津嶺子：「なんで英語やるの?」, 1974, 午夢館
- (10) 金田一春彦：「日本語」, 1967, 岩波書店
- (11) ジェイムズ・カーカップ、中野道雄：「日本人と英米人」, 1973, 大修館
- (12) 登村ヘンリー：「アメリカ人と日本人」, 1974, インフォメーション出版社
- (13) 樺垣実：「日英比較語学入門」, 1971, 大修館
- (14) 佐久間鼎：「現代日本語法の研究」, 1967, 恒星社厚生閣
- (15) D.C. パーランド：「日本人の表現構造」, 1973, サイマル出版会
- (16) 三上章：「日本語の構文」, 1972, くろしお書房
- (17) 三上章：「文法教育の革新」, 1963, くろしお書房
- (18) 開隆堂：「英語教育 9 月号」, 1974
- (19) 大修館：「英語教育 10 月号」, 1974